

ドS妖怪の日常

龍狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忘れ去られた者が集まる“幻想郷”：

そして、その幻想郷に一人のD.Sな妖怪が舞い降りる。

目 次

ドSな始まり	1
ドSの授業	8
ドS、主人公のところに行く	14
ドS、悪魔の館に行く。	20
ドS、白玉楼に行く	30
ドS、竹林に行く	42
ドS、妖怪の山に行く。	50
ドS、地底に行く。	58

ドSな始まり

どうもみなさんこんにちは。

俺の名前は【創助】《そうすけ》って言います。
名前は自分で決めました。

そして容姿については『黒髪赤眼』である

早速ですか俺の能力を紹介しましょう。

俺の能力は【思い通りに出来る程度の能力】

【ありとあらゆるものを作り出す程度の能力】

【T——を使う程度の能力】

【すべての攻撃を跳ね返す程度の能力】で、これもはつきり言ってチートだよね。

そして俺の種族は【妖怪】で、ここ【幻想郷】で生まれてからもう何百年かは経っています。

そつとして俺の正体は【転生者】です。

俺は大体この世界の知識がある。

簡単に言えば『美人美少女がたくさんいる世界』なんだよね、
ここで普通の男だつたら『よつしやハーレム造つてやるぜ!!』つて
奮闘すると思うけど、実際俺はハーレムとかには興味は一切ない。

確かに俺はイケメンに生まれたがこんなのはただのステータスだ。
顔だけで落ちたらその女はバカだ。

やつぱり女つて言うのは日ごろのことで徐々に好きになつていく
んだよ？

それは男性も同じ。だから『ハーレム造るぜ！』とか考へてるやつ
はほとんどの確率で失敗するからね。

そういう『ハーレム』って大抵無自覚で増えていくもんだから。
前世の漫画でたくさんそういうの見たからね。

そして、ここからメタ話になるがタイトルで分かる通り俺の性格
は【ドS】である。

そしてそのせいで周りからは【ドS妖怪】と呼ばれている。まあ不
服ではないが…

【ドS】とは簡単に言えば【サディスト】である。

まあこれも簡単に言えば『普通の神経の持ち主ではない』者のこと
を表している。

そしてちゃんとした話に戻るが俺はこれまで女性大妖怪や女性妖
怪たちに『BBA』と何度も言つた経歴がある。

そしてもちろんその妖怪たちにはこのチート能力で圧勝している
そしてその中には幻想郷ドS代表の【風見幽香】もいる。

そしてその【風見幽香】が今…

「見つけたわよ創助!! 今日こそあなたに勝つわ!!」

俺に傘を向けて怒鳴ってきた。
どうしてこうなった?

（回想）

俺と幽香が出会ったのは人里だつた：

俺がこの世界に転生した後に人里に向かつたのよね。
どうやら人里は敵意のない妖怪なら受け入れられる結界が張
られているらしいのよ。

それで俺は難なく入れた。

最初はいろんなところを見ていたんだ。それで…

「あなたたち…何やつてているのかしら？」

俺は一人の少女に殺意の籠つた目で見ている幽香を見つけたのだ。
俺はあまり原作知識はないが確かあいつは花妖怪。だとすれば…

「あなた…今、花をむしつてたわよね？」

やつぱり予想通りだね。

そして周りも何やつてんだよ。助けに行けよ。まあそんなこと人
間に普通出来る訳ないか：

仕方ない。ここは俺が言つてやろう。

俺は幽香に近づいてこの一言を放つた。

「おい、通行の邪魔だよ？」おばさん』

俺の一言（爆弾発言）で周りの空気は凍つた。

それを聞いてか周りの人間は皆その場から離れた。
そしてそれを聞いた幽香は少女ではなく俺の方を向いた。

「あなた…今、なんて言つた？よく聞こえなかつたんだけど…」

幽香は俺をさつきより殺意の籠つた目で見てくる。
やつぱり人をおちよくるのは楽しい…!!

「聞こえなかつた？まあ仕方ないか」「歳だからね」

その瞬間幽香は俺の目の前まで来て拳を振るつた。
俺はそれを避ける瞬間に能力を使つて人里から離れた。
幽香と一緒に。

「!?景色が変わつた!?」

「まあ驚くよね」

そして俺達が移動したのは草原である。
ここなら思う存分戦えるからね。

「さて…かかつてきな。』 B B A』
「……殺す!!」

そうして幽香は俺に妖力が大量に籠つた妖力弾を発射した。
これ完全に殺す気だね。まあそれが面白いんだけどね。

「じゃあ、これだね、【獣の槍】」

すると何もないところから槍が現れ、それで妖力弾をすべてかき消

した。

「?」

幽香は驚く。俺はそういう驚いた顔が好きだ。

そして俺が使った槍、これは【獣の槍】といい、原作は【うしおととら】と言う漫画の主人公が使う武器だ。

これは俺の隠されている能力の一つ、【他作品のネタを使う程度の能力】が関係しているのだ。

多作品のネタだったら何でもアリ。武器だつたり技だつたりをなんでも使える。

そしてこの【獣の槍】は元々は妖怪を倒すために作られた武器。本来妖怪の俺には扱えないのだが、そこらへんは改良した。そして使うと髪が伸びると言う設定も消した。そして暴走の危険もない

「何!? その槍は!?

「そんなことは自分で考えなよ。俺より『年上』なんだから」「やつぱりあんたは殺す!!」

そうして幽香は…

【マスタースパーク】!!

傘から極太レーザーを放つた。
うん、定番だね!! でも……

《CONFINE VENT!!》

するとマスタースパークは消えた

「ハア!? マスタースパークが…消えた!?

俺が今度使つたのは、原作【仮面ライダー龍騎】の【仮面ライダーガイ】が使う【コンフアインベント】のカードである。このカードは相手のカードの能力を無効化するものだ。これで幽香のマスタースパークを消した。

「これで終わりかい？」
「クソババア？」

あなたは一体どれだけ私をおちよぐれば気が済むのかしら？」「え、別こうらうよ、つてこなしてませう。こぞこぞ、

しているだけでえ～すう～!!!

一死になさ
い

そして今度は拳で攻撃してきた。

おゝおゝ一発一発にとてつもない殺意が込められている。

俺は金色のオーラを纏い、同時に髪の毛も黄色くなつた。

この原作は【ドラゴンボール】の【スーパー Saiyan】である。これは本来サイヤ人しかなれないのだがそんなのは関係ない。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ
!!!!!!」

連續でパンチキックを喰らわす。そしてやがてそのスピードは幽香を超え、どんどん幽香の方にダメージが入つて行く。

「ぐうう！」

両手を上下に開いた形で前方に突き出し、掌から気を放出した。
そのエネルギー弾は幽香に直撃し…

——ピチュ——ン!!

ピチュつた。
さて、帰るか。

その後何度も幽香に勝負を挑まれているがすべて返り討ちにして
いる。

そして今日も戦っているという訳だ。

まあ圧勝したが…

これは、俺のドSな日常の一ページにしか過ぎない。

ドSの授業

やあ前回ぶりだね。

創助だよ。俺は今回人里に居ます。

何故かつて？それは…

「はい。それじゃあ授業を始めます」

『『『『ハア~~~~イ!!』』』

教師（バイト）をしています。

え、何でかつて？実はね、前回話した幽香との戦い。

あの件でここ寺子屋の教師【上白沢慧音】さんに結構言われてね。それでなんやかんやあつてここでバイトすることになりました。え、なんやかんやつてなんだって？それはなんやかんやだよ

「さて、じやあ今日は妖怪の倒しか！」「待て待て待てえ！！」なんですか慧音さん？」

するとこの寺子屋の教師の【慧音】さんが教室に入ってきた。
なんだよ…いいところだつたのに。

「なんですか慧音さん」

「お前子供たちに何を教えようとしている!?」

「何つて…妖怪の倒し方ですよ」

「何故だ!?どうしたらそんな授業になるんだ!?」

「……まあこれは嘘なんですけどね」

「嘘はやめろ!!」

とまあこんな感じでこの人いじるのも結構楽しい。
彼女は眞面目だからな…こんな人が一番面白い

「じゃあ氣を取り直して、今日やるのは算数で～す」

とまあこんな感じで授業は進んだ。

「はあ～つつかれたあ～!!」

「お疲れ様だな。にしても、まさかあんなことを言うとはな…」

慧音さんの言つて いるあんなこととはもちろんさつきの話の『妖怪の倒し方』である。

もちろんこれはやらなかつたがやりかけようと何度もした。

そのたびに慧音さんが慌てるから面白い。

「ハツハツハツハ。あんなの冗談ですよ」

「だとしてもなんでもやるか？」

「面白かつたですね～慧音さんの慌てるところ」

「お前は一体どれだけ人を困らせれば気が済むんだ?」

「永遠にですかね」

「お前…絶対誰かに恨まれてるだろ…」

「それは自覚していることなので問題ないですね」

「問題大有りだ!!」

「チイ、うるせえんだよこの乳牛が…」

「おい……それはどういう意味だあ？創助…？」

「あ、そう言えばこの人半妖だった…
半妖だから小声も聞こえるのか…」

「いえ、別に？ただ思つたことを述べただけですが…」

「よし、創助、お前ちょっと私に一発殴られろ」

「教師がそんなことしてもいいんですか？」

「問題ない。ここでは誰も見ていないからな」

「そうして俺に拳を向ける慧音さん。
これは俺も対応するしかないな…」

「慧音先生!!たいへんですう!!」

すると一人の人里の男が部屋に入ってきた。
急なことで拳を戻す^{乳牛}慧音さん。

「な、なにがあつた？」
「実は、子供が一人行方不明なんです!!」
「なんだつて!!」

確かに緊急事態だな。

今の時間帯は夜。妖怪が活発になる時間帯だ。
もし人里の外にいるとなると、喰われるな…

「クソオ!!今は夜…妖怪が活発になる時間だ。どうすれば…！」

「あ、俺が行きましょうか?」

「本當か!」

「ええ、行つてやりますよ。後で焼きそばパン買つてもらいますけどね」

「…お前は本当に性根が腐つてゐるな…まあ今はそんなことはどうでもいい!!頼んだぞ」

「はいはい、任せておきんしゃい」

そうして俺は外に出る。

ていうか、俺は性根じゃなくて魂が腐つてるんだよ?そちらへんは分かつて欲しいな

まあそんなことは今はどうでもいいか。

移動手段は:バイクが良いよね

俺は図太いケータイを取りだして、『ライオンの顔』が描かれてるボトル』をセットした。

『BUILD CHANGE!!』

するとケータイがバイクへと変形した。

これは原作、【仮面ライダービルド】の主人公が乗るバイクだ。

俺はそのバイクに乗つて夜の森の中へと突つ込んで行つた。

そしてしばらくバイクで走っていると、見つけましたよ。
そこには一人の少女が倒れていて、もう一匹妖怪を見つけました
ね。

さくて、やりますか。
でも焼きそばパンのために一撃で終わらせよう。
俺は妖怪の前に立つ。

「？貴様…何の用だ？その人間は私が先に見つけた獲物だ!!横取りは
許さん!!」

「いや～ね。こつちもこつちで用がいろいろあるんです溶岩で溶解
されて死ねこの野郎」

「お前……言つている意味は分からんが、この私をバカにしていると
いうことだけは分かつたぞ…」

「それはどうも理解が早くて助かりまスケート場の氷の中に埋まつて
死ね」

「言つてる意味が分からんが殺す!!」

そうして妖怪^{カス}が俺に襲いかかつて來た。
無謀だなあ

「戦術変形】……『銀』

俺がそう言うとどこからかから長方形の物体が俺の横に現れ、それ
が俺の右手に纏わりつき、長剣へと変化した。
そしてその長剣で妖怪を一刀両断した。

「が…はあ…」

そしてそのまま妖怪は死んでいった。

呆気なく…つまらなかつたな…

まあいいか。俺が今使つたのは原作、【ワンパンマン】のS級ヒー

ロー【駆動騎士】の使う武器だ。

これは長剣だけではなく馬の下半身にもなれるものだ。

「さて…後はこの少女を連れて帰ろっと」

そうして俺は少女を人里へと連れて帰つて行つた…
あ、もちろんバイクでね。

そして少女を連れて帰つた後…

「慧音先生、約束の焼きそばパンを…」

「約束はしていない。後…今思つたのだが、焼きそばパンとはなん
だ？」

あ、そう言えば幻想郷には焼きそばパンはなかつた…
畜生！これじやあただ働きじやねえか!!

まあ…今後も先生のこといじればそれでいいか。

俺のドSな日常は、まだまだ続く…

ドS、主人公のところに行く

やつほお～。毎度おなじみ創助だよお～

俺は今回、この東方の主人公である二人に会うため、【博麗神社】に行つていま～す

「と、いう訳で、つきました博麗神社!!」

「『と、いう訳で』じゃないわよこのドS妖怪」

そして俺に話しかけて来たこのボンビース「今なんか失礼なこと考
えてなかつた…？」うわ～なんでわかつたの？

「勘よ、勘。そしてやつぱり失礼なこと考えてたのね…ちょっと来な
さい、退治してやるから」

やつぱりこの人の勘は——と言つより博麗の巫女の勘は鋭いなあ

＼

「まあまあ、取りあえずこれ食え」

「ムグウ!!」

そうして俺は靈夢に外の世界で買つて来た開封済みのシューク
リームを口に入れた。

そうした後に俺は箱ごと靈夢に渡した

「……おいしいじゃない。これどこで買ったの？」

「外の世界」

「ブホオ!! ゲホ、ゲホ!! ……あんた、外の世界つてどういうこと!?」

「そのまんまの意味さ」

実は俺の能力で外の世界なんて楽勝に行けるんだよねえ～

「ちょ!! ジャあなんで結界が緩まないのよ!!」

「そこらへんは俺の能力でちょちよいのちょい」

「あんた… 勝手なことしないでくれないかしら?」

「いやだね」

「今度こそ本当に退治するわよ?」

「結界修復してあげてるんだから別に問題ないでしょ」

「……確かにそうね」

うん、この巫女さんめんどくさがりで良かつた。

結構楽しいなあ

そしてそこへ：

「おーい霊夢う————つ!!」

そこへもう一人の主人公、【霧雨魔理沙】が現れた。

いやあ～相変わらずスリムな体型d 「なんか今失礼な」と考えてなかつたか…?」「別に?」

まったく…なんで主人公勢は心の声が分かるのかね? そういうのは地靈殿の主で充分なんだよ

「それで、今日はどうしたんだいスリムちゃん」

「やつぱりそんなこと思つてたんだな… 霊夢、退治していい k 「俺退治したらレアキノコ見つけるの苦労するよ?」 なんでもない」

俺も弱みを握っている(これを弱みを言つていいのかわからぬけど)。実はこのスリムちゃんと何度もキノコ狩りに行つてているのだ。俺の能力でレアなキノコが見つけやすいんだとさ

「それで、今日はどうしたんだ?」

「それはこつちのセリフよ魔理沙。あんた何しに来たの?」

「もちろん、遊びに来たぜ!!」

「まったく、遊びと言う名の運動ばっかりしているから胸に脂肪がかな【バン!!】あれ、気にしてた?」

「当たり前だ：お前、他人が気にしていることを平氣で言うんだな…」

よく見るとスリムちゃんの目が笑っていない。まあいいか

「靈夢を見る。靈夢は基本的に異変以外は運動しない。だから靈夢は結構胸の大きさも体重m【ババン!!】話の途中何だけど?」

「創助…あんた一回退治されてくれない?」

靈夢は俺が私はシュークリームの箱を置いて、立ち上がった。

「ちよつと、今日は怒つてもいいわよね?」

「そうだな：私も混ぜてくれよ」

そうして俺に殺氣を向ける主人公ズ。

「まつたく…一体誰が二人を怒らせたのやら。おーい当事者でこい」

「あんたよ（お前だろ）!!」

その声がゴングになり一斉に俺に弾幕を放つて来る。

まあ俺はそれをあえて受ける!!そして全弾当たるとすべての弾幕が二人に跳ね返った

「はあ?」

「私達の弾幕が跳ね返された!」

これが俺の能力の一つ【すべての攻撃を跳ね返す程度の能力】だ!!

これがあるから全く問題ないし、跳ね返すから俺もダメージを喰ら

わない。

まあ簡単に言えば遊びながら勝てちゃうんだよね

「あ～あ、暇だな。なにしよつかなあ～？」

「あんた、完全に私達のこと無視しているわよね？」

「ちよつと…逝つて来い」

——靈符【封魔陣】—— ——魔符【ミルキーウェイ】——

そうして今度はあの二人は俺にスペルカードを使ってきたね。
まあ無駄なんだけど。このくらいは能力解除してわざと受けてあげましようかね

そうして俺は弾幕が当たる瞬間にすることをした。そして…

「キヤアアアアアアアアアア（ウワアアアアアアアア）!!!」

そして攻撃は靈夢と魔理沙に当たり、二人はピチュつた。

え、なんで俺じゃなくて二人に自分の弾幕が当たったのかって？

それはね、俺が能力を使って、二人の居た場所と俺が居た場所を入れ替えたんだよ

自分で自分の攻撃に当たるなんておもしろいよね。

「さあ～てど、帰ろ」

そうして俺は帰つた

「しばらくして」

「ううん……こは…？」

「確かに私達はあるドS妖怪に負けて…」

「あ、そうだつたぜあのドS妖怪くっつ!!」

「まあ今日はもういんじやないの?」

「良くない!!私の気にしていることを言つたことを後悔させてやる!!」

「落ち着きなさいって。ほら、これあげるから」

そうして靈夢は創助からもらつたシュークリームの最後の一つ魔理沙に渡した

「えつ?!いいのか?!靈夢が人に物をあげるなんて…なにかの大厄災の予感か!?!」

「別にどうだつていいでしょ?いやなら私がもらうけど?」

「そんなこと言つてないぜ!!私がもらう!!」

そうして魔理沙はシュークリームを丸ごと食べた。
すると魔理沙の顔が徐々に赤くなつていき…

「み、水うううううううううううううう!!!」

魔理沙はそのまま水を飲むために井戸の水を早急に組み上げて桶

ごと飲んだ

「……やつぱり…」

ちなみに、このシュークリームの最後の一つにはねりワサビとねりからしがまるまる一本入っていたのだ。

靈夢はもしゃと思い、魔理沙に最後の一つを上げたが、案の定だつた

「ここに魔理沙がいて良かつたわ……おかげで私がああならずに済んだしね」

「靈夢うううっ!!お前、わかつてたんだな!!」

「ふ、だから言つたのよ。『私がもらうけど?』ってね」

「絶対許さないからな!! 弹幕で勝負だ!!」

「やつてやるわ!! まあ私が勝つけどね!!」

そうして靈夢と魔理沙の戦いがはじまつた。

ちなみに、創助は自分の家で、シュークリームの箱にしこんであつた小型カメラでその様子を見ていた

「ハハハハハ!! やつぱおもしろおううう!!」

「ギヤハハハハハハハハハ!!」

そして、この後、創助は笑いすぎて少しの間お腹を痛くした

ドS、悪魔の館に行く。

やつほおゝ。

毎度おなじみ創助だよおゝ

俺は今回、【紅魔館】に来ております

何故かつて？そんなの気分だよ氣分。

「さて…来たは良いものの…」

「グウ～～～」

今俺は紅魔館の門の前にいる。

そして俺の目の前には赤髪で胸のでかいお姉さん【紅美鈴】がいる。

…寝ている状態で。

全く、なんでこんなに無防備状態で寝ているのだろうか。

いや、そもそも寝ていること 자체が職務放棄か。

そんなことより、こんなに無防備なんだから、いろいろとやつてお
きたい

「さてと…」

俺は能力を使つて『ドS袋』を取り出した
この袋には俺のドSなことをするためのものがいろいろ入つてい
る。

まず、寝ている人にはこれだな

「テツテレテツテテ～テ～。マジックペン～（油性）」

これで美鈴の顔に落書きをする。

まず、ほつぺに猫ひげを書いて、その後に目蓋まぶたの上に開いている目

を書く。

そしておでこに『咲夜さんのバーカ』とか『咲夜さんのP A D オ
～』と書いていく。

そして鼻に割り箸を突っ込んで、頭にピエロの帽子をかぶせて、背
中にサンバの羽を…

うん、いろいろつけたらめちゃくちゃ面白くなつた。さて、入るか
そうして俺は無断で紅魔館に入つて行つた。あ、もちろん誰にも気
づかれずにね

——創助が紅魔館に入った後……

「……美鈴……」

そこには【十六夜咲夜】がいた。そして咲夜はすぐ怒つていた。
それは何故か、その理由は主に美鈴のおでこに書かれている言葉であ
る

「美鈴～？」

「ひやい!!さ、咲夜さん！べ、別に寝ていないです!!」

「寝てた…わよね？それに、その顔と装飾品はなに？」

「え…!?な、なんですかこれ!?」

美鈴はようやく自分の残状に気がついた

「まあなんとなく予想はできるわ。どうであのドS妖怪がやつたとし
か考えられないわね。だとしたら…もう入られてるわね」

「そ、そうですか…（もしかして、怒られずに済むかも…）じゃ、じゃ
あ早速探しにいかないと!!」

「その必要はないわ…」

「え、どういうことですか？」

「もうお嬢様はすでに今日お客様が来ることは予測していたから。そ

れより…あなたの顔、見せてあげるわ」

そうして咲夜は手鏡を取り出して美鈴に渡す。

「な、なんですかこれ!」

よくも…私の気にしていることを…

そうして咲夜はナイフをいくつも取り出す

「ちよ、ちよつと待つてください！これは私が書いたんじやありませんよ！」

九

Г(0·)

「それじゃあ……覚悟しなさい」

卷之三

はあうい、創助だよ。俺は今現在、この紅魔館の当主、【レミリア・スカーレット】こと…

「よう！遊びに来たぞ、【幼女その二】!!」「いい加減その呼び方をやめなさい!!」

そう：彼女（幼女）がレミリア・スカーレットである。こんな見た目でも五百歳である。

まあ個人的に口リババ『ヒュン!!』「危ないな」なんと幼女は俺に槍を投げつけてきやがった!!

「全く危ないじやないか【幼女その一】。あ、もしくは【吸血鬼幼女（姉）】と呼ぶ？」

「それも駄目！ちゃんとレミリアって呼びなさい!!」

「嫌だ。面白いから」

「キイイイイ〜〜!!」

あ、カリスマブレイクした。

「大丈夫ですか!?お嬢様！」

そしたら來たよ、完璧なメイドさんが。

「うう〜〜咲夜あ〜〜創助がまた私のことをお〜〜〜」

「創助さん：もうやめてくれませんか？」

ちなみに、彼女はこの幼女に忠誠を誓っているので、この幼女のことがになると度々暴走することがある。

では何故俺にはその牙を向けないのか？それは簡単、この子の心を一度だけ完膚なきまでにぼこぼこにしてやつたのさ。

そのことがトラウマなのか、彼女は俺に向かつてこない。

「嫌だね。俺はからかうのが趣味なんだ」

「相変わらずいやな趣味をお持ちで…」

「まあね。それじゃあ俺は【吸血鬼幼女（妹）】に会つてくるよ」

そうして、俺は能力を使つて瞬間移動した。

「ふええ～ん。さくやあ～」

「はいはい…大丈夫ですからね。お嬢様…」

場所は変わつて紅魔館の地下。

あの異変からフランは普通に外に出られるけど、ここは
【吸血鬼幼女（妹）】の部屋であるのではここに【吸血鬼幼女（妹）】は
いる

「やつほお～【吸血鬼幼女（妹）】

「あ、創助!!ていうかいい加減にその呼び方やめてよお～フラン、これ
でも495歳なんだよ?」

俺の目の前にいる【金髪吸血鬼幼女（妹）】がフランである。

「だあくめ。俺との約束があるでしょ？」

「そうだね!! 今日こそ創助に勝つてフランのことフランって呼んでもらう!!」

ちなみに約束と言うのはなんなのかというと…
紅霧異変のときにさかのぼる…

「やつほお〜」

「…お兄さん、誰？」

あの当時、【吸血鬼幼女（妹）】は俺のことを細い眼で見ていた。
ちなみに俺はこの部屋に能力使つて入りました。

「君の名前は？」

「…フラン」

「そうつかあ〜ところで君、どうしてこんなところにいるの？」

「…お姉さまが…ここにいろいろ…だから『なるほど大体分かった』まだ話の途中なんだけど…」

ちなみに、もうめんどくさくなつたので能力使つてフランの心読み
ました。

え、前回『心を読むのは地霊殿の主だけで充分だ』って言つたのは
誰だつて？知らんなそんなの

「つまり、遊びたいんだろ？だつたら俺が遊んでやる」

このとき、俺はとてつもなく悪い顔をしていただろう。
だつて…こんな幼女をいじるのは楽しいじゃないか！

「ホント!? だつたらアソボ!! 簡単ニ壊レナイデネ!!」

そうして【吸血鬼幼女（妹）】は俺に高濃度の弾幕を放ってきた。
俺はそれにわざと当たつて攻撃を跳ね返す。

「嘘!? フランノ攻撃が跳ネ返サレタ！」

ていうかこの【吸血鬼幼女（妹）】……結構な狂氣が体の中に貯まつ
てるな。まあどうでもいいか
仕方ない。ここは能力使おう。

俺は両手の掌に『風』と『雷』を出現させ、それを弾にしてフラン
を攻撃する。

これは原作【BLAZBLUE】の【レイチャエル・アルカード】が
使う能力だ。

「何ソノ能力? 風ト雷ヲ操ル能力ナノ?」

「さあね? 俺の能力が知りたければ俺に勝つてみな?」

「分カツタ!! ジヤアオ兄サンヲ殺セバイインダネ!!」

——禁忌【レーヴァテイン】——

そうして【吸血鬼幼女（妹）】は自分の手に赤黒い巨大な剣を持って
俺に攻撃してきた。

というか殺しちゃ意味ないぞ。

「まつたく、殺しちゃだめよお! 殺しちゃつたら友達できぬいじゃな
いのぉ~」

俺のその言葉に【吸血鬼幼女（妹）】は動きを止める。

「…ドウシテ? ドウシテナノ? ドウシテソンナコト言ウノ?」

「俺の本音さ。俺の能力である程度君の事情は分かった。君の能力のおかげで友達ができない。だつたら制御できるように頑張ればいいだろ」

「私ダッテソレヲヤツタ!!デモ出来ナカツタ! 私ハドウシタライイノ? ドウシタラ友達ガ出来ルノ?」

「まづ…その狂気をどうにかするしかないな。俺がその狂気を…ぶつ壊す!!」

そうして俺はなんでもありの能力を使ってフランから狂気を取り出した。

『ナンデ!? ナンデカラダカラダサレタノ!!?』

「お、お前が狂気か…じゃ、あばよ」

『ナニヲイツテ!!?』

こいつのような害悪には戦闘シーンはいらない。

早急に片づけよう。俺はあの狂気の周りにいくつもの『金色の扉』を出現させた。

そしてその扉が開くといくつもの攻撃体制で動きが止まっているキラクターたちが現れる

この金色の扉は原作【仮面ライダージオウ】の【グランドジオウ】の能力だ。

グランドジオウの能力は歴代のライダーの攻撃シーンを再現する能力だ。これをちよつちよつと変えて、それぞれのアニメや漫画のキラの攻撃シーンも出せるようにした。

そして俺が出したのは

・【戦姫絶唱シンフォギア】（雪音クリス ネフシュタンの鎧の攻撃 N I R V A N A G E D O N）

・【忍風戦隊ハリケンジャー】（ハリケンレッドの必殺技 超忍法・空駆け）

・【ワンピース】（ルフィギア2 ゴムゴムのJ E T 銃乱打）

・【インフィニット・ストラトス】（セシリ亞・オルコット　スター
ライト m k l l l）

・【トリコ】（ゼブラ死音）
である。

「ナ、ナンダコイツラハ!!?」

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「今度こそお前を踏み躡つてやる!!」
〔詔恩法・空駆け!〕

「ゴムゴムの……J E T ガトリング!!」

「喰らいなさい!!」

調子に乗つてんじやねえ——つ!!

『グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!』

はい、狂気さんは消滅しました。

「さてと…大丈夫?【吸血鬼幼女(妹)】?」

「うう……ん……お兄さんは……？」

お前と遊びに来るから」

「？」

【吸血鬼幼女（妹）】

「俺こ勝つをやめて！」

「俺に勝つたらやめてやるよ」

そうして俺は能力を使つて家に帰つたが…そのときのフランの顔はとても笑顔だつた。

とまあ、こんなことがあつたのよ。

ちなみに、今日も勝ちました。フランが負けたということで今日も
フランの部屋ににんにくを置いて帰りました。

今日も…楽しかったなあ～

ドS、白玉楼に行く

はいはいはいはいはいはい。 みなさんここにちは創助だよ。

俺は今…

「フフフ…相変わらず君の半靈はブニブニしていて気持ちいい」

「あの…持つてくれるんじゃないですか⁈」

「言つたじやないか。『君の荷物を持つてあげる』つて。だから妖夢の荷物である【半靈】を持つてあげているんだよ、感謝しろようむ」「最後…つなげ言葉にしないでくれませんか…後、お願ひなので、降りてください…」

ちなみに、俺は人里の帰りに【魂魄妖夢】に出会った。妖夢は大量の荷物を持っていたよ。ちなみに全部食材ね。まったくあの亡靈はたくさん食べる。最近は体重が増えているらしいな。（ちなみにこれは俺の能力で知りました）なんで亡靈なのに体重が増えるのだろうかね？

そして、今の状況だが、俺はまず半靈を持っている。そして妖夢が大量の荷物と俺と半靈を持っている。え、どういう状況かつて？それはね、妖夢が自分の頭の上にまで届くほどの量の買い物袋を持つて、その上に俺と半靈が乗っているのよ。

ちなみに、能力使つて浮いてるけど、体重だけ感じるようにしている。辛い顔がとても面白い…!!

「大丈夫大丈夫。これも修行の一環だと思えばいい。こうすれば筋肉がつくしね」

「…なるほど！これは修行!!さすれば幽々子様を守るために役立てる!!」

そうすると妖夢は急にスピードを上げた。これ結構楽しいな。

そうして、しばらくして冥界についた。

「はあ…はあ…」

ちなみに、こここの階段はめちゃくちや長い。だからその分辛い。

「さて、こゝが踏ん張りどころだぞ。頑張れ**貧乳妖夢**。お前ならできるはずだ」

「斬つていいですか？」

「斬られる理由は？」

「今失礼なこと考えてましたよね？」

「いや別に？妖夢の体型のことなんてまつたk（ヒュン!!）あぶな」とするとさ、この**貧乳**ちゃんが荷物を階段の奥の奥へと投げ飛ばして刀で俺を斬つて來たんだ。危ないな…

「なにすんだよ、あぶねえなあ～」

「…斬ります」

そうして俺に向かってくる**貧乳妖夢**。確かに彼女は幽霊系が苦手だったな：

そして女性…なら、あいつらがいいだろう

「出て来い、【ゾンビ松】ども!!」

そうすると、俺の周りにクリスマスになにも腐ったクソ共のゾンビが六体現れる。

これは原作【おそ松さん】の11話の冒頭に出てくる奴らだ。

「(ガツガツガツガツ…ボキッ!!)」

あ、赤い奴の首とれた。

「エツメリメリメリツ！」

青い奴は発狂している

「ケーキ→クリチュマチュ←ケーキ!!」

緑のやつは赤い奴が首が撮れた瞬間にこんな声を出しながら大爆笑していた

「アメマー!!」

うん…謎のうめき声

「アツ、ケーキ…アマア→イ…」

黄色のやつは腐ったケーキを甘いと言っている

「ケー→キ ターベードウー←?」

ピンクのやつは腐ったケーキを量産している
さて…こんな女を求めているであろう六つ子を見ての貧乳の反応
は…

「……」

あれ？どうしたんですかね？まったく反応が（バタン!!）あ、倒れた。

気絶していただけか。

「「「「「リア充死ねえ—————つ!!」—————」」

…クズどもには帰つてもらいましょう。

「ホーリー」

取りあえず適当に浄化魔法でもぶつ放つてあのクズゾンビどもを消滅させた。

クズにはあれくらいがちょうどいいからね。

「さて…亡靈に会いに行くか」

そうして、俺は瞬間移動して白玉楼に向かつた。

「と、いう訳でつきましたつと」

あれ、よく見たら入り口のところに買い物袋がある…まさかここまで投げられていたとは、スゴイな。見直してやろ牛見たいに大きくなり半人半霊を…」

「あら……また来たのかしら？ 妖夢は？」

急にかかるつて來た声。その方向を振り向くとそこには体重が増えたピンク亡靈がいた。

「やあ…幽々子ちゃん。体重はどのくk危ないな」

あの亡靈…急に蝶を俺に向かわせてきやがった。

「あなた…どうしてそれを知っているのかしら?」

「フ、情報収集は得意でね。その気になればすぐに分かる」「じゃあ…殺さないとね」

そうして、幽々子ことピンクの悪魔は俺に襲いかかって來た。
そう言えば…あの時もこんな感じだったな

あの春雪異変のときだつた。

俺は面白半分で【魔理沙ＶＳ妖夢】の戦いを見に來た。
そして…

『さあさあ始まりました、弾幕ごっこ対決!!』

「なにやつてんだお前!!」

「戦いの最中うるさいですよ!!」

この時、俺は解説をしていた。

ちなみにバリアを張つてるので絶対攻撃は当たりません。攻撃
当たつたら解説の邪魔になるからね

『まずは普通の魔法使いことスリムちゃんこと霧雨魔理沙、そして『切れぬものなどあんまりない』の魂魄妖夢!!
あんまりないのはあまり意味がない!!』

「斬る!!」

すると妖夢こと用務ちゃんが俺に斬りかかるがバリアで無意味。

「まつたく、解説の途中だよ? 用務ちゃん」

「漢字が違う!!」

あれえ～なんでわかつたのかな？まあいいか。

「お前…後で覚えとけよ？」

魔理ちゃんから強烈な殺氣が来た。俺は動じないけど。そう言え
ばここからだつたな。魔理ちゃんをいじるきつかけを作れたのは：

『まあ正直解説するのはめんどくさいので、さつさとやられてもらいましょう』

「なにを言つて『それじやあカモン!!』話を最後まで聞いてください
!!」

すると、俺の前に『館の門』が現れる。

「なんだあれ……紅魔館の門に似てるような似てないような…」

「ていうか：開いてますよあの門!!」

すると、そこから『青い鬼』が現れた。

これは原作【青鬼】に登場する青鬼である。

その門からぞろぞろと出てくる【青鬼】。ハンパンこと【フワツ
ティー】。主人公の仲間が青鬼化した【たけし鬼】【美香鬼】【卓鬼】。そ
して気持ち悪い【青海老】などなど……。

「なんだこいつら!? 気持ち悪い!!」

「ば、化け物!!」

「よし、行け」

俺が合図すると、一斉に妖夢に向かっていく青鬼たち。ちなみに全
員使役しています。

妖夢は恐怖に負け、そのまま逃げていく。そしてそれを追いかける青鬼。

後一時間は追いかけておけ

「さてと……主犯のところに行こうか」

一 前…まだ忘れてないからな?】

さつさと忘れとけ。お、来た来た

「魔理沙に……妖怪？」

(ちなみに、二人とはここで初めて出会いました)

「お、誰かと思えば貧乏巫女じやないか。ようやく異変解決に来たの？」馬鹿なの？」

「あなた、
退治するわよ？」

「その時は私も混ぜてくれ。ていうか今は異変解決だな！」

そうして二人は空を飛んでいく。俺は一人より早いスピードで一人を追い抜く。

「遅つpps」

」」」」」

二人はやけになりスピードを速めるが俺には追いつかない。そして上に着いた時には二人とも満身創痍だった。

「まったく、なんでこれから異変解決だつてときに体力切れになるな
か？バカなの？アホなの？」

「ハアハア…（キツー！）」

すると貧乏巫女こと靈夢が俺を睨みつける。おお、怖い怖い（笑）

「あら……まさかこまで来るなんて。妖夢はどうしたのかしら…」

急に声が聞こえたので俺達はその方向を振り向く。そこには【西行寺幽々子】がいた。邪魔なんだけど。

「あの白髪なら今頃追いかけつこの最中だぜ。それで、春を奪つた理由を教えてもらおうか!!」

そう金髪が言う。俺のセリフを取るな。スリムのくせに。

「お前本当に覚えとけよ…」

どうして心が読めるのかな？

「理由？いいわ、教えてあげる。あれを見て」

そうして幽々子は大きい桜の木を扇子でさす。うつわ大きい。

「あれの下にはね。あるものが埋められているらしいの。私はそれがなんなか知りたいから、この異変を起こしたの」

「そう…あなたを退治するわ!!さつさと終わらして、宴会をする!!」「やつてみなさい」

そうして三人は戦闘態勢に入るが…

「聞いてくださいよ、奥さん」

「誰が奥さんよ!!」

その空気を俺がぶち壊す。俺は幽々子こと。ピンクの悪魔に聞こえるようにわざと大きな声で話す。

「あそこに飛んでいるピンクの人いるでしょ？　あの人、聞いた話だと、クズらしいわよ？」

「(ピク)」

「まつたく…あの人の我儘でたくさん的人が迷惑しているのが分からぬのかしら？」

「(ピクピク)」

「ていうか知りたいのならもうちよつとなんか他に方法を見つけるとかそんなことしなかつたのかしら？　まああの人努力つて言葉と無縁してそうだしねえ！」

「(ピクピクピク)」

「それに聞いた話だと、あの人すごく食べるらしいわよ？　体重とか気にしていないのかしら？」

「(ブチっ!!)」

あ、キレた。

「……殺して…いいわよね？」

そうして放たれる狂氣レベルの弾幕。あ、チョウウチョも混じつている。

こりや本気で俺を殺しに来てるな。

「おい!!お前が余計なこと言うからあいつマジ切れしてるぞ!!」「え、本当のこと言つただけじゃん」

「死になさい」

そうしてあり得ないくらいの弾幕が俺にめがけて放たれる。

チクショウ、俺は痛めつけられる側じゃなくて痛めつける側なんだよ。と、いう訳で切り札投入。

「!?な、なにこれ!？」

そして毎度おなじみ【グランドジオウ】の能力でえくす。
ピンクの悪魔にはピンクの悪魔。と、いうわけで：俺が今回出したのは

- ・【星のカービィ】
- 【ウルトラソード】
- 【ドラゴストーム】
- 【スノウボール】
- 【ミラクルビーム】
- 【ギガトンハンマー】。

である。

え、同じキャラだろつて？違う時間帯から召喚してるから問題ないんだよ。

と、いう訳で話を戻して…

「え、きやあああああああ!!」

まず、スノウボールが幽々子を押し潰し、その後にミラクルビームが地面からビームを操って幽々子を上空に突き上げる。そしてドラゴストームが下から現れ幽々子を焼く。次にギガトンハンマーで何度も叩く。

「う、うう…」

そして最後に…ウルトラソードが何度も剣を変えて幽々子を斬る。

——。ピチュ——ン!!

さて……帰るか。

俺は能力を使って家に帰った。

「……私達の出番……なかつたな」

「そうね……」

と、言うのが俺の記憶……そして今現在、幽々子は俺の目の前で寝て
いる。相変わらず弱いな……

「さて、帰ろ——」

俺が振り返ると、あの時妖夢が投げ飛ばした買い物袋に目が届いた。

…………フフフフフフフフフフフフ

「幽々子様……大丈夫ですか？」

「ええ、何とか……ていうか妖夢、あいつ連れてこないでよ…」

「いや……荷物が重かつたもので…」

「はあ……取りあえず食べましょう」

「そうですね。今日もたくさん作りましたから」

そうして二人は食べ物を口にする。

すると、二人の顔が青くなつていく。そして…

「苦いいいいいいいいいいいいい!!」

と、絶叫した。

実はあの後、創助は食材の一部を【ゴーヤ味】に変えていたのだ。
こんなこと出来るのは創助だけである…

ドS、竹林に行く

さてさて、今日もよろしく創助です。

俺は今日は永遠亭に来て います。なぜかつて？そりやあ天狗になつて いるあのお姫様の鼻を折りに来ました。
え、なんで そ うなつて いるかつて？あのニートはゲーム好きだからね。

「さて…来てみたは良いものの、やつぱりあのマツドサイエンティストがなあ～」

マツドサイエンティストとは八意永琳である。
あのおばさんは…

「さて、おつじやつましまあ～（ビュン！）危ないな」

俺が入ると急にマツドサイエンティストが矢を放つてきやがった。
非常識だな。

「何するのかな？」

「今…失礼なこと考えたでしょ？」

「あ、わかつた。億超えてるのにやるね」

「死になさい」

そうして次は弾幕を放つてきた。

「邪魔だな。これを使おう」

そうして俺は自作の薬を永琳に投げる。永琳はその瓶を弓矢で壊すが、こぼれた液体は俺が能力で永琳にぶつかける。

「ややあ!! なにを……」

「服を見てみな」

するとマツドサイエンティストは大声を上げた。
実はあの薬は服限定で腐敗させる薬なのだ。

「いくら強くても…服がなくちや戦えないよね」

「言葉でやる！」

「言葉じゃなくて行動でやれ。じゃあなー露出狂」

そうして俺は永遠亭に入る。

「ヤアヒト…あの二一ートはど、」がなあ～」

そうして俺はしばらく歩くと…

「…罷か」

大量的の罠を見つけた。こんなことをするのは因幡てゐしかいない。

「罷…解除!!」

俺がそう言うと罠がすべて解除された。

「げ！ 罷が…！」

「捕まえた

全くこの兎は…そうだ。

「てゐ：君にこれをあげるよ」

「なに：靴？」

そう、俺がてゐにあげたのは靴ではなくスニーカーだ。

「これは今日から君のだ」

「え、いいの!? よし、これを売つて…」

フフフフフ、俺がそんなに優しいわけないじゃないか…【い】
【キレ
ネンコ】

するとてゐの前に赤と白の横ストライプ模様の囚人服を着た、少し濃いめのピンクのウサギが現れた

「え？」

「キレネンコ、こいつがお前のシユーズを盗んだ犯人だ」

「え!？」

するとキレるキレネンコ。てゐを殴り蹴るをし、てゐはそれをなんとかよける。

「じゃあねえ〜〜〜

「てめえ——————つ!! 絶対許さないからね——————つ

!!

そうして逃げるてゐとそれを追いかけるキレネンコ。

あれは原作【ウサビツチ】の主人公だ。まあ簡単に言えば兎には兎をいう訳だ。

「と、いう訳で、到着しました」

「あ…」

するとそこにいたのは引きニートこと輝夜。

「今日も来たよ」

「来たわね!! 今日こそ勝つ!!」

そうして始まつたゲーム。序盤はバイクレースだ。

「フフフフフ、私の勝ちよお——————つ!!」

終盤に輝夜が俺の前に出た。

「これで勝つ!! 私は難しいレベルでもう何回も一位取つてんのよ!!」

「そーかそーか」

「これでええええ勝つ…え?」

結果は俺が一位。俺は最後にアクセル全開でニートを追い抜いた。
そしてキメ台詞の…

「だあ——————つははははだつせ——————おめ——————あんだけいき
がつといて負けてやんのオ!! 猿かおめーはなにが難しいレベルで何
回も一位取つてるだよ!? あ、!? 笑つちゃうぜマジで!! ワハハハハハ
——————つ」

ザ・罵倒。

「こ、この——————つ!!」

「ひ——————ひ——————息できぬ——————つ!!」

「じょ、上等よ!! 次こそは…!!」

そして次のゲームは格闘ゲーム。

輝夜はボクサープレイヤー、俺は熊のプレイヤー

「おらおらおらおら!!」

「……」

輝夜が何度も殴るが、俺は一発で殴つてKO。

「……も、もう一回よ!!」

「はいはい」

二回戦目【頭を噛んで勝利】

「……」

三回戦目【アルゼンチンバックブリーカーを決めて勝利】

「……」

四回戦目【十字架に飾つて勝利】

「……」

「弱」

「つ、次よ!!」

次は銃撃戦ゲーム。輝夜は1 2 8 4 2 3 2 1 5と言うハイスコアを出した。

「二イヽヽヽツ」

「……」

「本日の最高得点よ!!あなたはこれを超えられるかしら?」

俺はこれを二丁拳銃で見事勝利。今だ輝夜の出したことのない2
000000をたたき出した。

「……に、二丁拳銃なんて汚いわよ!!」

「勝負にぎれーもきたないもあるかよ」

「次よ次!!」

次はモグラたたきゲーム。

輝夜の特典は【39】で『ゲス』

対して俺は【145】で『神様』だ。

「……」

次のゲームはマ○オカート。

輝夜のLOST

俺はWINNER

「……」

次はクレーンゲームのゲーム。

輝夜の取った数は0

対して俺は30を超えた。

「……」

最後にこのゲームのおまけのおみくじ。

結果は輝夜が【超大凶】

俺が【大吉】だった。

一バタ一

あ、倒れた。

：帰るか。

俺が帰る最中…

「あ」

藤原妹紅に会った。

偶然だな

「お前は…」

「やあ妹紅ちゃん。今日はどうしたの？」

「その呼び方やめろ。私は輝夜を倒しに来たんだ」

「悪いね。さつき倒してきたわ（精神的に）」

「なんだと！……いや、あいつの性格から考えるとあなるか…」

以外と物わかりが良いな…

「いやあああああああああああああああ！」

「？」「？」

急に聞こえた声に俺達が振り向くとそこには…

「助けて————ツ！」

キレネンコに追われている優曇華の姿があつた。
あ、シユーズ持つてる。交代したな。まあいいか。

そうして俺は満足して帰りました。え？あの兎はどうしたかつて
？無視無視。

ドS、妖怪の山に行く。

創助です。

俺は今日妖怪の山に来ています。まあ妖怪の山だからもちろん「そこの妖怪!! なにをしている!!」はい絡まれた。

「……君は？」

「私は白浪天狗の犬走権だ!! 今すぐにこの山を立ち去れ!!」

…よし、いいこと思いついた。

俺は権の後ろに回つて氣絶させる。

「なつ!? うつ…」

さてさて、どうしてくれようか…フフフフフフフフフフ…

（場所は変わつて天狗の里）

—ザワザワザワザワ…—

「おいあれつて…！」

「樺!? 可哀そうに…」

「まさかあの妖怪に手をだしたのか!?」

「もしかしてあいつ…新しく入った哨戒での撃を知らなかつたのか
!?」

周りの天狗たちがそう言う。
そして肝心の樺はと言うと…

「おら、キリキリ歩け」

「……」

現在、創助によつて首輪を繋がれている。

「……なんですかこれ…こんなことして大天狗様が黙つてゐるわけが
…」

「そこらへんは問題なし。前に倒したから」

「え？（そう言えば撃つて…？）」

樺は周りの天狗の言葉に耳を傾ける。

「なあなあ、新しい撃つてなんだ？」

「なつ!? お前、知らねえのか!? お前も知つておけ。そうじやなきやあ
んな風になるぞ？」

「まじで!? それで結局、新しい撃つてなんなんだ？」

「それはな、あの妖怪には手を出すなつてことだ。あの妖怪は一言で
言えばドSで、花妖怪をも上回る力を持つているんだ」

「まじかよ!! あの花妖怪を?! 知つておいてよかつた…あんな風にはな
りたくないしな…」

「ていうか、あれ首輪がなかつたら普通なエスコートだよな…ドS妖

怪だからドSコートか?」

「うまい!!」

「……」

改めて、自分がどれほどの相手に喧嘩を売ったのかを理解した柾。

「(…ドS…だからこの首輪…そして公開処刑…)」

「あ、そう言えば腹減つたな。飯食いに行くか」

「?」

そして着いた場所は…

「……鴉の餌屋?」

『『『ドSだ!!』』』

柾の言葉と、周りの天狗たちの心の声が重なった。

そして龍の前には自分の鴉（式神）に餌を与えていた老人天狗がいた。

老人天狗は鴉たちに餌を与えていた。

「おや、満席だ。開くまで待つか」

「……」

「お、ちょうど一席開いた。ほれ、喰え」

「……」

そうして仕方なく餌入れに近づく柾。
それを見て…

「ほら、さつさと食え」

「はう!!」

創助は鞭を使つて樅のケツをたたく。

「ほらほら、どうした？ サツと食え」

「うう…」

「「「「櫻……可哀そうに……」「」「」「

周りの天狗たちが同情していると…

「つ!! もう我慢できねえ!! おいお前!! もうやめろ!! そもそも、俺達天狗の里に入ることは禁止されているんだぞ!!」

一人の鴉天狗が創助に突つかかつた。

「あいつ、バカか!!」

「逃げろ!!」

そうして逃げ惑う天狗たち。

もちろんのこと創助は不意打ち。

創助はどこからか天狗のうちわを取り出して、大熱風で天狗を攻撃

した。

「鴨焼きの出来あがり♪」

[...]

樺は絶句して物も言えなかつた。

「あなたは…戦士としての誇りはないんですか!?」

「俺戦士じゃないし。それに、ペットが主人の俺にたてつくな

「ペット!?

「そう、今日一日、俺の暇つぶしに付き合つてもうおう

「…そんなあ～～」

そうして始まつた樋にとつての地獄…：

「よし、魚釣りをするぞ」

「え、餌は「お前が餌だ」え？ぎやああああああああああああああああああ!!」

—ギオオオオオオオオオオ!!

「いやああああああああああああああああああああ!!」

「ほら逃げるな。餌の役割を果たせ。餌のくせに」

「助けてええええええええええええええ!!」

「鬼ごっこをしよう。もちろん俺が鬼だけど」

「つ!!（この隙に逃げられる!!）」

「レディ～～ゴー!!」

——シユババババ!!

「よし、これで撒け!!「ドーン」え？いやああああああああああああ!!」

創助はバズーカを放つた。

樋に3000のダメージ!!

樋は気絶した。

「よーし、次は缶けりだ!! 蹴るぞー!!」
「(今度こそ逃げてやる!!)」

創助は缶を蹴る。権はそれを追うようにして逃げる。
だが黙っている創助ではない。創助は剣を創造して権に投げる。

「いやああああああああああああああああああ!!」

「ほらほら、ハンドボール投げならぬソード投げだよ!!」

まさにドSポーツであった。

ま

創助は柾の首輪の鎖を引つ張ったまま空を飛んだ。
柾はそのせいで息が苦しい状態にある。

「おや、創助さんに柾ではないですか!!」

すると、射命丸文に会つた。

「お、文」

「ていうか柾…その首輪はどうしたんですか？」

「…」

「（察し）ああ……そうですか。これはいいスクープになりそうですね
!!」

「ちよ、文さん!?」

「おーおー、やれやれ。ちなみに今日やつたことの写真もあるぞ。全
部乗せていい俺が許可する」

「お、いいですか！それじゃあ私はこの辺で!!」

「ちょっと待つてくださいーい!!!」

文は超高速で帰つて行つた。

「……後で覚悟しておいてくださいね？」

「はーいはーい。確保ね」

「…（ピクピク）」

「それじやあレツツゴー！」

そうして再び始まつた地獄。

そしてしばらくした後天魔のところについた。

「げええ!!お前は…!!」

「よう天魔。これ、お見上げ」

「え？」

そうして天魔に柾を渡す。

「じゃあねえく楽しかったよ今日一日」

そうして創助は帰つて行つた。

「……お前……まさかあいつと戦つたのか？」

「……はい……」

「……今度からは気を付けるように」

「……はい……」

そして翌日、文によつて昨日のことが幻想郷全体にばらまかれ、柾
はしばらく部屋から出て来なかつたそな：

柾

ドS、地底に行く。

はいはいはいはいはいはいはいはいはい!!
創助ですよ。

やあ皆さん。創助ですよ（二回目）。

皆さんは今クーラーが効いた部屋で寛いでいるでしょう!!（小説を
書いているのは夏です）。そして俺は今…!!

「あつついわ!!」

今。地底に居ます。

ていうかなにこれ、熱いんだぞ!! そう言えば…、これは旧地獄が近い
場所にワープしてしまったな。

「クーラー機能ON!!」

俺がそう言うと、俺の周りが涼しくなる。さつき言ったことはなし
ね。

さてされ、さつさと、ここを離れるか。じゃないとあの幼女にうるさ
くいわれそうだしね。

さて…地底に一瞬でつきました。
やつぱりまずは…

「やつほ」

「……」

「お前さんは……」

そして俺が早速会つたのはこの門番的な二人組【キスメ】と【黒谷ヤマメ】。そして通称は…

「やあ、魚」

そう、魚である。

何故かつて？それはまずヤマメって言う魚いるじやん。

それにキスメって言うのはいないけど、【キスの目】って感じで認識している

「……」

「その呼び名やめてくれないかな…」

「そんなことより、さつきこの上でキスとヤマメを釣つて来たんだ。
食わない？」

「さらつと話を変えないでくれるかな…ていうか遠慮しておく」

「（コクコク）」

「なんで？おいしいのに」

「いや…同じ名前のもの食べるつて気が引けるし…ていうかあんたわざとやつてるでしょ」

「なつて、当たり前じやないか」

「……」

「そうか……じゃああの幼女（鬼）と勇儀にやるわ」

「……あんた、よくそんなこと言えるね」

「……」

「じゃあね。あ、あと【ピ

】

俺がそう言つた瞬間、二人は弾幕を放つてきたが倒してきた。
え、俺がなんて言つたかつて？秘密だ。

——ザワザワザワザワ……

場所は変わつて地底。

俺が今いる場所だ。そして今何故か騒がしかつた

「おい……またあの妖怪が来たぞ」

「まじかよ……今回は誰が犠牲になるんだ？」

「俺はいやだぞ。お前やれよ」

「はあ!? バカ言つてんじやねえよ!!」

騒がしいなあ…

すると、俺の前に二人の鬼が現れた

「お、勇儀に幼女（鬼）じゃないか」

「いい加減その呼び方やめろお!!」

「ハハハ、やっぱ創助は面白いねえ!!」

俺の前に現れたのは【星熊勇儀】と言う大人と【伊吹萃香】と言う幼女だ。

「とにかく、飲みにいかないかい？」

「いいけどさ、ちょっと疲れたんだよね。さつき二人相手にしたから『……一人つて、もしかしてキスメとヤマメのことかい？一人になに言つたんだ？』

「え、なにって『ピ――』って言つただけだよ」

俺がそう言うと、二人だけではなく、周りの鬼たちも驚愕した表情になる

「お前…よくそんなこと言えるな…」

「え、普通じやん」

「それは絶対普通じやない」

「そうかそうか」

「まあいいか！飲みにいくぞ!!」

「俺の話聞いてた？」

「そんなことはあどうでもいい!!」

…よし、こうしよう。

俺は能力で影を操つて二人の目を閉じる。

ついでに感覚——つまり妖怪特有の気配察知が出来ないようになた。

「な、なんだあ!?」

「前が見えない!?」

「じゃあね」

——ザシユ!!——

そして、二人のあるものが切れた。

それはなにか？それは角である。

鬼にとつて角は命の次に大事なものだから、そんなことされたら…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

と、こんな感じで暴れる。

ちなみに二人は感覚が失われているので暴走に近い行動をしていく。

「ちょ!!姐さんと萃香さんが暴れ出したぞ!!」

「やりやがったなあのドS妖怪!!」

「しかも角切りやがった!」

「それじやあ俺は地霊殿に行つてくるから。後処理よろしく」

そうして俺は瞬間移動をして地霊殿に直行した。

「あ、逃げたぞ!!って、え、ぎやああああああああああああああああ!!」

さてさて、俺が瞬間移動してついた地霊殿には…

「やあ来たよ。【さとり幼女（姉）】!!」
「殺しますよ？」

おーおーきついきつい。

「一体何の用ですか？」

別に？ただちよつかいかけに来ただけだよ

「帰つてくれませんか？」

「いやだね」

……あ、用事出来たわ

「…一体なんの用事が出来たんですか？」

「うるさいぞ。お前なら読めるはずだあゝさとり幼女（姉）。お前がやらなきゃ誰がヤル!!」

「黙つてくれませんか？私でもあなたの能力状すべてを読めないので」

「まあそんなことはどうでもいい」

「（…本当に殺したいですね…）で、結局用とは一体なんなんですか？」
「ああ、実は「大変ですさとりさま!!」チイ…」

すると、さとり幼女のペツトの一匹【火焔猫燐】こと【お燐】が部屋に大急ぎで入ってきた。

何事？

「どうしたの？……なんですか？」

「はい、実は勇儀さんと萃香さんが暴れまわつてて……しかも犯人がドS妖k……」

あ、
目があつた。

この世の終わりみたいな顔をするな

「なんで……、」に……？」

「い、いえ!!」

かなり動搖しているな。となれば……

「そう言えば、君のコレクション。^{死体}さつき見て来たけど結構良かつたよ」

「え、本当ですか？エヘヘヘ…」

「だからさ、あまりにも綺麗だつたから…妖怪たちにあげちゃつた」

工
“
?

「！」

そうして、お燐はすぐに部屋から出て行つた。

「…創助さん。お燐に嘘を言わないでくれませんか?」

「あ、ばれた？」

「当たり前ですよ。で、結局たつた今出来た用とはなんなんですか？」

「それはね 「出たな悪者!!私が退治してやる!!」 これ」

そして爆発する俺とさとり幼女とその周り。

俺は速やかにバリアを張つたため、怪我はなし。
だがさとり幼女は…

「せめて、私も守ってくれませんかね…?」

あ、無事だつた。

そして現れたのは…

「悪者!!さとり様を好きにはさせないぞ!!」

出て来たのは【靈鳥路空】でした。

一体どんな思考をしたら主人事吹つ飛ばそうとするのかな?

「さとり幼女……何故あいつは俺のことを悪者つて言つてんのかな
?」

「それよりあれ、こうなることが分かつてたんですけど?」

「(未来を見たからね…)まあ、なんとなくかな?」

「ふざけてるんですか?まあいいです。ちなみにですが、お空はどう
やら勇儀さんと萃香さんが暴れたことを聞いて、その原因が創助さ
んだかららしいですよ?」

なるほどなるほど。

どうでもいいが、こうしよう。

俺はお空に向けてバズーカを二つ向ける。

ちなみにこれの危険性はさとり幼女は分かつてているだろう。

「ちょ!!そんな危ないものをお空に放たないでください!!
「くらええええ!! 【ハイパーバズーカ】!!」

原作【機動戦士ガンダム】の【ユニコーンガンダム】の武器でもあるこのバズーカ。【ハイパー・バズーカ】は装弾数は5発で連射可能。一撃で戦車を破壊するほどの威力があり、放映当時の資料によれば10km先の標的をも撃破できるらしいという設定がある。

つまり、こんな密室空間でそれが全弾放たれれば……

ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!

と、大爆発するわけだ。

さて、どうなつたかな？ちなみに、俺は“俺と建物だけ”にバリアを貼っていた。

[...]

實際、さとり幼女の服はあちこちが焦げており、お空は氣絶してい
る。

「……創助さん!!」

あ、さとり幼女が弾幕を放ってきた。
創助に0ダメージ。創助は逃げた。

「さて……残りはここだけか」

俺は今現在、地底の橋にいる。
そして橋と言えば…

「全く、あなたのその行動 자체が妬ましいわ」

そう、嫉妬の妖怪こと【水橋パルシイ】さんである。え、パルシイ
じやなくてパ尔斯イだろって？どうでもいいんだよ。

「パルシイさん」「パ尔斯イよ。後さん付けやめてもらえる？」「パルシイ
さん」

「……何よ？」
「……今日も平和だね」
「……どこが？」

そうしてパルシイさんは違う方向に目を向ける。

「おらあ————!!

「うおおおおお!!!」

『『『『ぎやあああああああ!!!』』』』

「…………」

「あんたのせいいろいろと大変なことになつてるんだけど」

「すげえやパルシイさん。現実に目を向けるなんて」

「いや、あなたが原因よね？」

「そいいえば…あなたが『妬ましい』つて入つてるときに咬んでるハンカチ。あれどつから取つてきてんの？」

「え、自家製だけど」

「うつわまじか！以外と家事スキルが高いんですね。今まで鬼たちのおざりで金をすっぽかしていたビツチだと思つてましたぜ」「ぶつ殺すわよ？」

「（まあ実際、この子を狙っている鬼も少ながらずいるが、やめとこう。面白くない）さてと…いつまで俺の背中にいるんだい？こいしちゃん」

「うわっ、ばれた？」

すると、突然俺の背中に現れた帽子を被った幼女。【古明地こいし】。

さつきあつて来たことり幼女の妹である。

彼女は無意識操る程度の能力を持つており、無意識操ることができるのだ。

「つて、こいし…あんたいつからいたの？」

「えへへ、さつきからずつといたよ？」

「取りあえず降りてくんない？」

「うん、わかつた」

そうしてこいしちゃんは俺の背中から降りる。

「全く、出歩いていると【影男】に捕まるぞ？」

「影男って誰よ」

【影男】……原作【乱歩奇譚 Game Of Laplace】に出てくる少女愛好家。まあ簡単に言えばロリコンだ。前にその男を出

したことがあつたが……

『少女という存在は、私にとつて神に等しい』

『死ね』

『グアアアアアアアアアアア』

……と、こんな感じで気持ち悪かつたので一発で退場してもらつた
よ。

「さて、そろそろ帰ろう」

「いや、あれどうにかしていきなさいよ。全く……その余裕さが妬まし
いわ」

「いやだね。じゃあねえ／＼」

そうして、そのまま帰りました。
めでたしめでたし

— 1 —

『『『『あの妖怪どこ行つたあ
』』』』ツ!!』』』

めでたしめでたし：なのかな？